

のことを問われた内容がある。この中に、「蒲生本城は壊れたところがない」ことや、「帖佐の平安城に集まって防ぐ」「山田の篠原城で防ぐ」「愛宕山の永福ヶ城で防ぐ」との記述があり、これは蒲生のみならず、各郷の地頭に下問されたものと考えられる。幕末の緊張状態の史料ではあるが、江戸時代を通して本城の他の山城が認識されていた。これらから江戸時代をとおして地元の郷士たちが中世山城跡について十分認知していたことを示している。

「當分ハ山野之躰二候」は一国一城令をはばかり、あくまで公的なものであって、外見上はそうであっても、城の諸施設の崩壊につながるものについては、手を入れて来た可能性が強いと考える。

このように中世山城跡についての認識は十分持ち合わせているなかで、中世山城跡である城山の管理をしていたかであるが、以下の史料がある。

蒲生麓は出水麓ともに、おおきな外城であるが、その『御仮屋文書』の中の「蒲生衆中高帳」<sup>32)</sup>にみえる諸役のなかに、元禄7年(1694)・正徳元年(1711)・元文3年(1738)にそれぞれ御城内山留役がみられ、役高が記されている。また国分新城についても、前出の『国分諸古記』の中の元禄12年の「國府新城繩引帳書」に「新城山留衆」とある<sup>33)</sup>。薩摩国山崎郷では『山崎御仮屋文書』慶応4年(1868)に、「御城見廻壱人」がみえる<sup>34)</sup>。これらの史料から、郷士の所役に「城山見廻」があり<sup>35)</sup>、城山の維持・管理が郷士の職務として存在していた。

管理においては、鹿児島県立図書館所蔵の「薩藩御城下絵図」に(鹿児島)城山に番所があるが<sup>36)</sup>、一時はこれと同じような番所や仮小屋を設けて管理し、それが「山留役」「山留衆」として職名に残存していったのではなかろうか。このため前章で述べた近世の日常品が残されることとなった。

## 5 まとめ

中世山城跡は、元和の一国一城令を受けても、破城とされず、そのまま一部は麓集落に取り込まれて管理されていく。シラスの丘の切り込みを中心に土塁・曲輪・空堀等を作り出す作業は、他地域の石垣や土塁などの中世末の城郭とは異なって構築や改修が容易であり、破城の痕跡も明白ではなかったと考えられる。放置すれば、山野と化し、城としての機能を失ったかに見える。曲輪や土塁の木々や土壌の発達、地滑りの原因となり、さらに放置すれば曲輪縁辺の土塁は次々と崩壊していくものと考えられる。しかしながら現在残る中世山城跡は、高い土塁を残し、深い空堀を有し、曲輪もよく残存している。崩壊につながる大きな雑木の伐採など少なからず管理され続けた。明治維新について、薩摩藩の郷士数の多さが、兵の徴集・編成を容易にしたといわれるが、つねに軍事的な拠点を認知しながらシュミレーションされていたのではなかろうか。重要な中世山

城跡については、江戸時代前期については仮小屋等を設置し、その後は郷士に所役を残して管理をおこなってきた。そのため外城制度に組み込まれた中世山城跡においては、近世遺物が出土するのである。

外城制度の麓集落の中の中世山城跡は地域の伝統の証しであり、郷士の精神的な紐帯として近現代も機能しつづけてきた。そのため残存している多数の中世山城は、交通の便や立地に恵まれた城跡もありながら、いまだに現代の諸開発から守られ続けて来たのである。はじめに述べた串木野城跡の奥村氏・肝付氏が、警察・司法をつかさどる横目の職家にあったことは偶然ではない。

中世山城跡の発掘調査は、中世山城が広大な城域をもつことから、ほとんどが諸開発事業にあっては部分的とならざるを得ない。小規模・部分的な発掘調査だからこそ、明確な目的意識をもたなければ、発掘調査自体が破壊の免罪符的役割としかならない。これらの発掘調査はいずれ成果としてまとめられ、住民に総合的に歴史的に呈示されなければならない。そうでなければ城跡の歴史性や重要性が認識されずに、開発にさらされ、消え行くのである。城跡は城域全体の把握が必要であり、災害や治山事業等により止むおえない場合も多いが、諸開発によって切り取られ、全貌が把握されることもなく、市民に歴史が語られる事なく消滅してしまうことを危惧しているところである。史料収集や古文書等の解釈に、県歴史資料センター黎明館の栗林文夫氏に特にお世話になった。出水市の岩崎新輔氏・宮之城町の川添俊行氏・知覧町の上田耕氏・鹿児島大学埋蔵文化財調査室の新里貴之氏にも資料収集等で協力を得た。記して感謝したい。なお、近世遺物については、黙殺され報告書に掲載されていない可能性もある。出土していないとした中世山城跡から出土していることもあるだろう。主要でない遺物から、別の時代の重要な資料や、別の機能を暗示する可能性もあり、資料の扱いについては十分な検討が必要であろう。史料の引用が原典からのものでなく、郷土誌や引用文献・報告書からの引用になってしまった。近世文書への不勉強のためだが、どうか御寛願したい。

## 【 註 】

- 1 上田 耕 2000 「串木野城の城域と構成」『串木野城跡』串木野市教育委員会
- 2 三木 靖 1987 「研究資料よりみた本県の中世山城跡」『鹿児島県の中世城館跡』鹿児島県教育委員会
- 3 五味克夫 1967 「伊作城跡」『(鹿児島)中世史研究報』第7号 鹿児島中世史研究会 1971 「建昌城の史料」『中世史研究会報』第30号 鹿児島中世史研究会 など
- 4 中野 翠 1984 「中世高山城と肝付氏について」『鹿児島の歴史と文化』鹿児島県歴史資料センター黎明館
- 5 三木 靖 1984 「平山城の変遷—応永24年合戦を中心として」『平山城』川辺町教育委員会
- 6 河野治雄 1992 「谷山氏の時代と谿山郡の歴史」『谷山弓場城跡』鹿児島市教育委員会
- 7 林 吉彦 1932 『考古学上より見たる清水城跡』極東孔版
- 8 福田信男 1937 「薩摩郡に於ける古城址の調査」(川内郷土史研